

レーザーコンパス

基礎研究から独創研究へ

岩 本 雅 民*

Masatami IWAMOTO*

不景気である。3Kと呼ばれる会議費・広告費・交際費の3項目による不況対策も底を突いたようだ。もう一つのKとして研究開発が槍玉にあがろうとしている。しかも、この研究開発の中にはKが二つも含まれているのだ。研究の転換期と云われる所以である。研究の冬の時代の始まりになるかもしれない。

つい先ごろのバブル経済の時代に「基礎研究ブーム」が起こった。わが国の研究歴史において研究者が最もハッピーな時代であったように思う。多くの若い人は口々に基礎研究をやりたいと云った。また、我々も基礎研究が大切だと云ってきた。ただし、よく知られているように、多くの若い研究者は基礎研究とは何かがわかっていない。若い研究者たちは基礎研究という言葉に万国共通の辞書の定義があることさえ知らないことが多い。研究者は不勉強なものである。

私の知る多くの「米国の研究者は基礎研究が嫌い！」である。米国は歴史的にプラグマティズム（実用主義）の国である。「日本は基礎研究をしていない」という日本非難は米国研究者

の本意ではないように思われる。

「基礎研究とは方法論」にすぎない。基礎研究をやるだけでは本来意味のないことである。米国は「日本は基礎研究をしていない」と非難しているのではない。米国は「日本は独創的な研究をしていない！」と非難しているのだ。このように考えるべきではないか？

「米国人は独創的な研究が好き！」なのである。独創とは人の真似をしないことだ。わが国の研究をその源泉にまで溯ってみると、外国にその起源があることが多いのは否めない。

独創性重視は必ずしも良い面ばかりではない。人類の進歩とは模倣の積重ねである。学ぶとは真似ると同義語である。独創性を過度に重視すると経済効率や人類全体の進歩にマイナスになる危険性すらある。

しかし、基礎研究を標榜する企業研究所や大学・国立研究所は独創性を重視する研究管理が望ましい。

研究の転換期である。「基礎研究から独創研究へ」が新しいキーワードである。

*三菱電機株式会社（〒100 東京都千代田区丸の内2-2-3）

*Mitsubishi Electric Corporation (2-2-3 Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo 100)